新春の五島・島原紀行

高橋　祐吉

福江まで

私が人文科学研究所の総合研究に顔を出したのは、これまでにわずか一度のみである。優柔不断な所為なのか、いつも踏ん切りが付かなかったためである。とりわけ年明け早々に実施される総合研究の場合がそうであった。何となく気ぜわしく感ぜられたからであろう。しかし今回は違った。かなり前から出掛けるつもりだったからである。昨年前立腺のガンが見つかったので、2ヶ月に渡って放射線治療を受けてきた。それも11月末には終了したので、その後は普段の生活に戻ったわけだが、老いに加えて結構長い間の闘病暮らしのために、何となく自分の肉体と精神に自信が持てなくなってしまった。そんなわけで、気分転換と言うよりも自信を回復するために、今回の総合研究に参加させてもらうことにしていたのである。一抹の不安がなかったわけではないのだが…。

出掛けた先は、五島列島と島原半島であり、ともに初めての場所である。1月4日の待ち合わせ場所となったのは、長崎市内にある長崎港ターミナルビルである。五島列島の福江島に向かうには、ここからジェットホイルに乗る。五島列島の地誌について簡単に紹介しておこう。長崎は県内に1,000近い島々を抱えており、島の数では全国でもっとも多い県なのだが、そのうちの東シナ海に浮かぶ140近くの島々が五島列島である。九州本土の西に位置するこの列島は、北東側から中通（なかどおり）島、若松島、奈留（なる）島、久賀（ひさか）島、福江島の5つの大きな島およびその周辺の小さな島々からなる。もともとは連山だったものが海に沈んで高い部分だけが残り、それが島となったとのこと。こうして、複雑なリアス式海岸線を持つ美しい景観ができあがったようだ。この五島列島は、北東から南西に長く伸びているため、列島全体を大きく二つに分けて、五島最大の福江島を中心とする南西の島々を下五島（しもごとう、五島市）、2番目に大きな中通島を中心とする北東部を上五島（かみごとう、新上五島町）と呼ぶこともある。江戸時代に福江藩の中心であった福江島には、下五島の呼び名はあまり使われないとのことだが、上五島は中通島以上によく使われる呼び名だという。

ジェットホイルが向かったのは、五島観光の玄関口となる福江港である。船旅は快適で、1時間半ほどで夕暮れが迫りつつある福江港に着いた。少しばかり寂しさを感じる港に降りたって、遠くまで来たことをあらめて実感した。こんな感覚を旅情とか旅愁と言うのであろう。羽田から長崎に向かう機内に薄い冊子が置いてあったので、見るともなく眺めていたら、そこに

五島列島の記事があった。五島は「釣りの聖地」だとのことである（島はどこも釣りの聖地と呼ばれるようだが…）。一日がかりで福江にまで辿り着いて、少しばかり自信が回復してきたようにも感じられた

長崎の世界遺産考

翌日の 5 日から本格的な調査が始まった。この日と翌日は教会巡りが中心の旅程であったので、私には何やら巡礼の旅のようにも思われた。私はキリスト教の信者ではないので、敬虔な祈りを捧げたりはしなかったが、それでも、今ここにあることに感謝しつつ、来し方行く末に思いを巡らしながら見学した。普段とは違って居住まいを正していたことは言うまでもない。今回の総合研究が、こうした教会巡りを軸に組み立てられたのは、2018 年に潜伏キリシタン関連遺産が世界遺産に登録されたこととも関連していたに違いなかろう。

長崎には、「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業」と「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の２つの世界遺産がある。現生と来世に深い関わりを持った、何とも対照的な両遺産である。2015 年に登録された前者の遺産は、19 世紀半ばから 20 世紀初頭にかけて、日本でも産業革命の波にさらされて、急速に近代産業の育成が図られたことを示す遺産である。いわゆる「富国強兵」のための「殖産興業」政策の展開に関わった遺産だとでも言えばいいのか。この世界遺産は、8 県 11 市に所在する 23 の構成資産（世界遺産を構成している各資産のこと）からなり、そのうち長崎には造船業と石炭業の発展を示す８つの資産がある。端島（軍艦島）などはよく知られているのではあるまいか。世界遺産に登録される際に、朝鮮人労働者の戦時下での徴用＝強制労働に対する対応が、日朝間で大きな問題となった。世界遺産というものは、それを構成する資産全体の歴史的価値を紹介するものであるから、触れて当然であり触れなければならない事実であっただろう。

そこで、もう一つの世界遺産である。2018 年に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、17 世紀から 19 世紀の２世紀以上にわたるキリスト教の禁教政策下で、ひそかに信仰を伝えた潜伏キリシタンによる独特の宗教的伝統を物語る文化遺産である。こちらは、長崎と熊本の天草市にある 12 の資産で構成されており、島原の乱の主戦場となった原城跡（南島原市）や潜伏キリシタン信仰の多様な展開と信仰組織の維持を示す各集落、潜伏キリシタンの終焉を象徴する大浦天主堂（長崎市）などからなる。原城跡と大浦天主堂を除くかつての潜伏キリシタンの集落の多くは、今でも人々の素朴な営みが続いている農漁村の集落である。

この 12 の資産がどんなものなのかと調べていたら、共同通信社の記者であり新上五島町出身の江濱丈裕（えはま・たけひろ）によって書かれた『長崎・五島　世界遺産、祈りが刻まれた

島』（書肆侃々房、2020 年）に行き当たった。ここに、先の 12 の資産がキリシタンの弾圧、潜伏、移住、禁教廃止の流れのなかに、たいへんわかりやすく整理されていたので、それを参照しつつ紹介しておこう。詳しくは、長崎県世界遺産課の公式サイトをご覧いただきたい。

まずは《弾圧期》であるが、この期の資産としては島原の「原城跡」がある。信徒たちが受けた弾圧の歴史を物語る象徴的な場所だと言えよう。1637 年から翌年にかけて肥前島原と肥後天草のキリシタン信徒たちが立て籠もり、幕府軍と戦った舞台である。一揆勢が全滅した原城跡からは、多くの信仰道具や人骨が出土しているのだという。次いで、キリスト教の禁教政策のもとで信仰が独自の発展を遂げた《潜伏期》となるのだが、ここには 5 つの資産が含まれている。仏教や神道を信仰しているように装った外海（そとめ）の「大野集落」や「出津（でず）集落」。自然崇拝とキリストの教えを融合させ、今も当時のままの信仰を護る人々が住む「春日集落」。貝殻を信仰具とした天草の「崎津（さきつ）集落」（熊本県）。そして、禁教時代に信徒が処刑されたこともあって、殉教の地として聖水の採取場とされた「中江ノ島」である。

続いて、信仰継承と《拡大期》に入るが、この期には 4 つの資産が含まれている。18 世紀末には、外海からの移住者によって五島列島にも隠れキリシタンの信仰が広がっていく。聖母マリアに見立てて観音像を拝んだ「黒島の集落」。神社の氏子となることで信仰を装った「野崎島の集落跡」。ほぼ無人の島に移り住んだ「頭ヶ島（かしらがしま）の集落」。そして未開の地に移住し自らのかたちで信仰を続けた「久賀島の集落」である。その後、潜伏の終わりと《変容期》を迎えることになる。ここには 2 つの資産が含まれている。潜伏キリシタンが移住して開墾し、禁教が明けてから全員が信徒に復帰した「奈留島の江上集落」と、約 250 年の禁教時代を経て「信徒発見」のあった「大浦天主堂」である。大浦天主堂で信徒が発見されたことは、潜伏キリシタンの間に分岐を生み出すきっかけとなった。1873 年には禁教の高札が撤廃されるのだが、その後の潜伏キリシタンは、再びカトリックに復帰して信徒となった人、潜伏期の信仰をそのまま続けた人、そして仏教や神道の信徒となって棄教した人へと分岐していったのだという。

島の教会群を巡りながら

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産に登録されるにあたっては、紆余曲折があったようである。「長崎の教会群を世界遺産にする会」の活動が始まったのは 2001 年だということだから、登録されるまでに 17 年もかかっている。その間の経緯に関する話を、井出明『悲劇の世界遺産　ダークツーリズムから見た世界』（文春新書、2021 年）を参照しながら、もう少し続けてみる。2007 年には、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」として世界遺

産の暫定一覧表に登録されるのであるが、その後推薦を取り下げなければならない事態に見舞われる。そうなったのは、イコモス（ユネスコの諮問機関である国際記念物遺跡会議のこと）から禁教期に焦点を当てた資産の構成にすべきであると指摘されたからである。資産の候補として挙げられていた多くの教会建築は、そのすべてが禁教期ではなく信仰が認められた 1873（明治 6）年以降のものなので、文化財としての価値が低いとみなされたのである。その結果、日本の建築家である鉄川與助（てつかわ・よすけ）によって設計・建築された教会群はすべて資産から外され、唯一江戸の末期にフランス人が設計指導をした大浦天主堂だけが、世界遺産の登録の対象となった。

井出は、「ヨーロッパの感覚からすれば、キリスト教文明について体系的に学んでいない東洋の大工が、見よう見まねで建てた教会は、たとえ地元の人達の心の拠り所であったとしても、文化としてオーソライズすることは難しかったのであろう」と述べている。鉄川與助抜きに五島列島の教会群を語ることはできない。それほど重要な人物なのだが、日本側はイコモスのアドバイスに従い、潜伏キリシタンたちが作り出した「集落」の独自性に焦点を当てて再申請することにしたのだという。こうして、ようやく「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産に登録されることになった。教会群から集落へとテーマも変わり、それにともなって構成資産も変わったのである。

日本側は、イコモスの指摘を受けるまでは、迫害に耐えて信仰を守り抜いたといういささかわかりやすいストーリーを思い描いていたようである。しかしながら、当初のストーリーは修正を余儀なくされ、徳川幕府による禁教と迫害の歴史につても触れなければならなくなった。イコモスが、禁教の歴史についても触れるべきであるというのであれば、井出が指摘しているように、その前提として禁教政策が採られることになった背景についても、つまびらかにされなければならないことになる。

今回廻った教会は、当然ながら禁教令が解かれてから建てられたものであり、地元の信者の人々にとっては、貧しい暮らしの中から私財をなげうって（時には労力をも提供して）建てたものである。夢や希望の象徴であったに違いなかろう。それぞれの教会の完成に至るまでの苦難の歴史が、そのことを物語っているように思われる。たとえ世界遺産の構成資産から外れたとしても、見学すべき価値のある文化財である、私にはそんなふうに思われた。世界遺産のみが立派だというわけではなかろう。

今回の総合研究では、たくさんの教会を巡ったので、年寄りの私にはひとつひとつの教会の特徴を思い出すことが困難である。その場所を記憶するために、写真を撮ったり、絵はがきや冊子を買ったり、周りの風景に目を凝らしはしたのだが、記憶することはそう簡単ではない。福江島では井持浦（いもちうら）教会、貝津教会、三井楽（みいらく）教会、水ノ浦教会、楠

原教会、堂崎教会と 6 つの教会を廻ったが、私のような人間には、教会がどうしても似通った建築物に見えてしまうので、最初に訪ねた井持浦教会と最後に訪ねた堂崎天主堂、それに今回初見の映画『くちびるに歌を』(2015 年）の舞台となった水の浦教会を除くと、他はもうぼんやりとしている。

翌日の中通島でも、桐教会から始まって、冷水（ひやみず）教会、青砂ヶ浦教会、曽根教会、頭ヶ島（かしらがしま）教会、鯛ノ浦教会とやはり 6 つの教会を巡ったが、ここでは映画『男はつらいよ　寅次郎恋愛塾』(1985 年）に登場する青砂ヶ浦教会と、私が途中の石段で足を踏み外して横転した頭ヶ島教会ぐらいしか記憶にない。人前で転倒したのでかなり恥ずかしかったが、怪我でもして一行に迷惑をかけないで済んでよかったと思うべきか。映画の方は今回あらためて見直したのだが、急逝することになるクリスチャンの老婆役を演じた初井言榮（はつい・ことえ）の演技が、何とも印象深かった。

五島のキリシタンとは

五島におけるキリシタンの歴史は、1562 年にイエズス会から派遣された日本人医師ディエゴが、時の領主の病を治療したことに端を発しているとのことである。1566 年からは宣教師による布教が始まるのだが、洗礼を受けた者は 4,000 人にも達し、島民の 3 割はキリシタンになったと言われている。短期間にそこまでの広がりを見せたのは、領主が受洗したことが大きく影響しているに違いない。しかしながら、秀吉や家康の禁教令と相次ぐ迫害によって信者の数は減少し、18 世紀の中頃には信者はいなくなったようだ。復刊された浦川和三郎の『五島キリシタン史』(国書刊行会、2019 年）によると、「一人の潜伏キリシタンも、何らの遺跡、証拠書類をも留めざるまでに湮滅（いんめつ)」したとのことである。

その後、五島列島における信仰が広がりを見せることになるのは、1797 年になってからである。当時肥前の大村藩では、人口の増加を抑制するために、長男以外の子供の間引きを奨励していたようなのだが、それとは対照的に、五島藩では干魃（かんばつ）や疫病のために人口の減少に苦しんでいた。そこで、五島藩が大村藩に対して領民の移住を申し出るのである。移住してきたのは、大村藩で迫害を受けていたキリシタンたちであった。大村藩は以前藩主の大村正純（おおむら・まさずみ）が日本で初めてのキリシタン大名となったこともあって、禁教後も隠れた信者が多かったのである。この移住をきっかけとして、再び五島においてキリシタンが増えていくことになる。

彼らを受け入れた五島藩は、外海から来る農民たちが潜伏キリシタンであることは知っていたが、どうやら黙認したらしい。大村藩とは違って五島藩では、キリシタンに対して割合寛大

だったようなのである。九州から大分離れた離島だったことも、その一因ではあるのだろう。迫害から逃れられるので、外海の彼らは新天地への移住を喜んだようである。そんな噂が広まったこともあって、最終的には約 3,000 人ほどの領民が移住してきたらしい。

しかしながら、五島にはすでに地元住民が居住していたので、移住者が住める場所は開拓されていないところに限られた。辺鄙な場所や痩せた土地しか与えられなかったのである。移住者に対する差別もあった。当初は、「五島へ五島へと皆行きたがる。五島やさしや土地までも」と俗謡に唄われた五島であったが、その後「五島極楽行ってみて地獄。二度と行くまいあの島へ」と唄われることにもなった。移住者は、厳しい暮らしを余儀なくされたものの、そこに信仰にもとづいた楽園を築こうとしたのであろうか。別な見方をすれば、厳しい暮らしに耐えることができたのは、信仰というものがあったからに違いなかろう。そのあたりのことを、先の『五島キリシタン史』は次のように描いている。

> 大村藩では極端に産児制限を実行し、男子は長男だけを残して、その他は殺させてしまう。たとえ父母がそれを忍びかねて哺育したにしても、他家へ養子にでも遣わさないかぎり、これに家督の幾分でも譲って分家を立てさすことを許さない。無論キリシタンは児を殺すことの赦すべからざる罪悪たることを心得ている。しかし次男以下は藩内に留まっていてはいつまでも日陰者で、一個の公民権すら得ることあたわぬので、自然他領へ逃亡する者が多かった。彼らが五島藩の招きに応じて移住を決行したのは実にこれがためであるとか。
>
> 五島藩は一万余石の小藩である上に、中央を距ること最も遠く、ややもすれば江戸参勤の費用さえ捻出しがたいほどであったから、もし藩内から異宗門の徒でも現われたとあっては、それこそ非常な難問題で、とうてい貧弱な藩財政の堪え得るところではない。ために当局側からつとめてこれを隠匿し、かえって告訴して出た者を処罰するというあんばいであったとかで、移住のキリシタンたちも、貧困はしても平穏裡にその信仰をつづけることができた。五島および外海地方の古老はみなそのように語るのであるが、果たして事実それに相違ないのであったかは、保証のかぎりではない。
>
> 信者側の口伝によると、五島から 1,000 人の百姓を貰い受けたいと申し込んだのに対して、3,000 人もが移住したのだということである。もとより 3,000 人が一度に出かけたわけではなく、先住者をたよって次から次へと引っ越したものらしく、（中略）かくて大小の五島群島には、上は野崎島から、下は嵯峨島に至るまでいやしくも山の拓くべく、船の繋ぐべき余地だにあらば、我れ勝ちにと割り込んで行ったので、ここに 3 軒、かしこに 5 軒といたるところにキリシタン部落を見るようになった。

五島のキリシタンの状況は、以上のように描かれているのであるが、こうした安定は明治に入って急変した。いわゆる「浦上四番崩れ」に続く「五島崩れ」が、久賀島から始まったからである。ここで使われている「崩れ」とは、潜伏時代に信仰を守り抜いてきた組織が大規模に摘発され、取り調べを受けることを言う。単独では普段聞かぬ言葉である。明治になって開国したにもかかわらず、禁教政策が解かれることはなかった。そうしたなか、1865 年の大浦天主堂での「信徒発見」をきっかけに、五島でも隠れキリシタンたちが次々に信仰を表明し始めた。こうした動きに対して、明治政府は彼らを一掃するために弾圧を開始するのである。

「残虐暴戻の極み」とまで言われたこの弾圧によって、五島の全島に及ぶ多くの信徒が算木（さんぎ）責めにあった。三角の木材を並べた台に正座させられ、膝の上に重い石板をのせられたのである。そうした拷問に加えて、「郷責め」と呼ばれた村民による私刑も広がった。移住してきた隠れキリシタンに対する差別がもたらした、住民による迫害である。久賀島の「牢屋の窄」（ろうやのさこ）では、静かな湾に面したわずか 6 坪の牢屋に約 200 人ものキリシタンが収容され、42 名の信徒が命を落とした。この悲劇がプティジャン神父によってヨーロッパに伝えられると、日本は各国から非難を受けることになり、明治政府はようやくにしてキリシタン禁制の高札を撤去するのである。この顛末は、森禮子の『五島崩れ』（主婦の友社、1980 年）に小説仕立てで描かれている。

禁教・殉教・棄教・背教

今回の総合研究に参加させてもらったことがきっかけで、日本におけるキリスト教の歴史を学ぶことになった。もちろん俄仕立てで雑知識を手に入れただけなので、そのことについて偉そうに何かを語るつもりなど毛頭ない。この間読んでみて面白かったのは、遠藤周作の『キリシタン時代－殉教と棄教の歴史－』（小学館、1992 年）であり、渡辺京二の『バテレンの世紀』（新潮社、2017 年）である。この二著の体裁は対照的で、前者は文庫版の小ぶりのエッセー集であるが、後者は 500 ページになんなんとするような大著である。年寄りには大著を読み通すほどの気力ないので、こちらは拾い読みしただけある。

潜伏キリシタンが五島を含めて各地に生まれたのは、言うまでもなく禁教令があったからなのだが、ではこの禁教令はどのような背景のもとに登場したのであろうか。そのあたりを知りたいと思って手にしたのが先の二著である。長崎県が企画に関わっている『旅する長崎学』（長崎文献社、2007 年）という 6 冊からなるシリーズの冊子などもあるが、こちらはキリスト教のもたらした文化的な遺産や受難の歴史を中心にビジュアルな形で紹介してあるのみで、残念ながら私の期待に応えてくれるものではなかった。

ところで先の二著であるが、とりわけ興味深かったのは遠藤のエッセー集に収録されていた「キリシタン時代ー日本と西洋の激突」と「日本の沼の中でーかくれキリシタン考」である。彼の言うところを聞いてみよう。キリシタン時代に我々が興味を持つのは、「日本人が初めて西洋とぶつかった時代」だからであり、その時に「キリスト教というもっとも我々には縁遠い、距離のある、しかも激烈な宗教」の洗礼を受けたからである。だからこそ、「あれだけ多くの殉教者と背教者が出、おびただしい血がそこに流れた」のであり、こうしたキリシタン時代をある種の「審美的な懐古趣味」だけで眺めていてはならないというのである。

私などは、「審美的な懐古趣味」に近い気分で五島の教会群を眺めてきた人間に過ぎないから、先のような遠藤の指摘にいささかたじろいだのだが、そのたじろぎはさらに続く。「日本人とキリスト教の対決」は、秀吉の禁教令以後の迫害期にこそ典型的に現れた。戦国諸大名たちが南蛮貿易による富国強兵の見地やその他の功利的な理由からキリスト教の布教に寛大だったのに対して、この西欧から来た宗教に初めて「鉄槌をくだした」のは秀吉である。彼の主君だった信長が、上洛した宣教師に好意を示しその活動に保護を与えたことはよく知られている。秀吉は初期には信長と同じような態度を取っていたが、1587（天正 15）年の九州征伐が完了した直後に、突然キリスト教の布教を禁じ宣教師の国外退去を命じるのである。

いったいなぜなのだろうか。一見すると、信長と秀吉との間には宗教政策上の違いがあるように見えはするものの、遠藤は「本質的には同じ」だと言う。つまり、二人はキリスト教と宣教師に利用価値がある間だけ利用したにすぎなかったからである。信長にとってのキリスト教は、彼をてこずらせた「一向宗を滅ぼすために利用できる西欧の宗教」であったし、秀吉の場合は、同じような利用価値を感じるとともに、九州征伐と朝鮮侵略のためにキリシタン大名たちを懐柔し活用したかったからである。

だが秀吉は、九州征伐の間に二つの危険を目にするのである。一つは、一向宗に見られたような宗教的なエネルギーが生み出す「反乱可能性」である。九州におけるキリスト教が、一向宗と同じように農民や群小の大名に根を下ろし始め、「教会を中心とするかたい結束」を持ち初めていたからである。もう一つは、長崎とその周辺に、宣教師たちが私領を所有していることを知ったことである。彼にはそこが宣教師による植民地の如くに見えたのである。遠藤は、「これは秀吉だけの一方的な罪ではない。そのような疑いを招いた宣教師側の不手際にもよる」とも述べている。

そもそも、キリシタン時代の教会は内部に大きな矛盾を抱えていた。それは、ポルトガルとスペインに典型的に見られたのだが、東洋侵略と植民地主義の企図に便乗して、キリスト教の布教を行おうとしていたことである。暴力をもともなったこうした動きは、「イエスの愛の教え」とは相反するはずであるが、この時代の教会はそうした国家の企図を布教のために黙認して、

宣教師を送り込んでいたのである。そこに見られるような宗教上の「教義と政治の矛盾」を、日本に来た宣教師たちは根本的に解決していなかったし、宣教師の中には植民地主義を当然のように考える者さえいたという。だから秀吉が不安と恐怖を感じても当然だったのである。遠藤はそんなふうに指摘している。

こうして、秀吉はこれまでのキリスト教に対する寛大な対応を捨てて、禁教に踏み切るのである。しかしながら、禁教政策を採りながらも他方では南蛮貿易の利益を手にしたかったために、「見て見ぬふり」と迫害とが共存することになったようである。その後家康も秀吉に倣って外国人宣教師と主だった日本人聖職者を国外に追放した。宣教師たちの後ろ盾となっていたキリシタン大名たちは、その頃には既に滅亡したり棄教していたので、禁教に反しているとして捕縛されれば、棄教するかさもなくば殉教するしかなくなった。勿論ながら、棄教を偽装して潜伏キリシタン（禁教解除後に再び信徒に戻った人々）や隠れキリシタン（禁教解除後にも独自の信仰形態を維持した人々）として生き延びることは、可能ではあったのだが…。

棄教を説得されても肯んぜなければ、身の毛もよだつような拷問が待ち受けていた。徳川幕府は死の恐怖を味わわせて棄教を迫ったからである。幕府を驚愕させた島原の乱の後遺症である。精神的な拷問としての絵踏みの他に、「転びキリシタン」の名を生み出した俵責め、『沈黙』の主人公フェレイラを棄教させた穴吊し、雲仙岳の煮えたぎる熱湯をかけた雲仙責め、炭火の上に正座させた炭火責め、身体の一部を切り取っていく刻み責め等々。こうした拷問を受けても、それに耐えて棄教しなければ死ぬしかなく、そうした死は殉教と呼ばれた。殉教を崇高なる死として崇める立場からすれば、聖職者の棄教は背教でもあった。このように、禁教令下の世界は、殉教と棄教と背教が混じり合った血塗られた世界のように見える。

今日の我々の感覚からすれば、あまりにも凄惨な世界として映るので、こうした事態をどう理解すればいいのか、私などにはよくわからない。キリスト教どころか宗教から縁遠い世界に生きているようであれば、困惑するのは当然であったろう。人間はこれほどまでに残酷になれるのかという問いも生まれたし、あるいはまた、これほどまでに残酷な拷問を受けても、信仰を捨てない人間がいるのかという問いも生まれた。しかしあらためて考えてみると、何故直ちに殺害してしまわずに凄惨な拷問を繰り返したのであろうか。そこもまた謎であった。渡辺京二は先の大著『バテレンの世紀』で次のように書いている。興味深い指摘なのでそのまま紹介してみる。

> 禁教令の実施者たちは、いたずらに惨虐を好んで宣教師や信者を拷問したのではない。キリシタンを手っ取り早く根絶したいのなら、宣教師であれ信者であれ、見つけ次第殺せばよいのだ。殺さずに棄教させようとしたからこそ拷問という手段に訴え、相手の頑強さ

に比例して、拷問の残酷さもエスカレートしたのである。役人たちは信者や宣教師を苦しませて楽しんだわけではない。何としてでも棄教させたかったのであって、ここに当時の「迫害」の特異性がある。殺さずに棄教させようとしたのは、住民の場合、彼らが貴重な労働力だったからだろう。キリシタン故に住民を皆殺しにしたのでは、武士権力の存立の余地はない。宣教師の場合、殺して殉教の栄光を得させるよりも、棄教させた方が効果はずっと大きい。パードレ（神父のこと）すら教えを棄てたとあれば、信者の志気が沮喪するのは必定である。

キリシタン集落と教会のこと

五島列島の福江島と中通島でたくさんの教会を眺めてきたのだが、それらの教会がどのようにして建てられたのかということについても、ここで簡単に触れておきたい。『旅する長崎学』の第 6 号に、五島の教会群の話が登場している。そこでは、五島列島の教会は「信仰の証」であることは勿論だが、それとともに「東西文化融合の象徴」であると書かれている。日本という東洋の地に、西洋からキリスト教という宗教がもたらされ、その象徴としての教会が日本人によって作られたのであるから、「東西文化融合の象徴」と言ってもおかしくはない。明治になって禁教令が解かれ、潜伏する必要がなくなったキリシタンたちは、自分たちの信仰の証である教会の建設に踏み出した。迫害から解放され、教会を自由に建てることができるようになったのだから、余程嬉しかったに違いなかろう。五島で数多く建てられた教会は、島の入り江や海に面した高台に建っており、集落の景観に融けこんで今でも美しい姿を見せている。どの教会にも、長い潜伏の時代のなかでも信仰の灯を守り通した、キリシタンとその子孫の思いが、込められているのであろう。

五島における信徒たちは貧しい暮らしを余儀なくされていたので、教会を建てることは並大抵のことではなかった。教会は信徒の汗の結晶とも言うべき存在であり、教会の前に佇むたびにその苦労が偲ばれた。ところで、世界遺産として認定された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、12 の遺産から構成されており、五島には 4 つの遺産が存在する。野崎島の集落跡、頭ヶ島（かしらがしま）の集落、久賀島の集落、そして奈留島の江上（えがみ）集落（江上天主堂とその周辺）がそれである。今回われわれが眺めてきた世界遺産の構成資産は、頭ヶ島の集落である。

勿論ここにもよく知られた頭ヶ島教会がある。石積のなかなか立派な教会である。ここを訪ねた際に、隣に小さなショップがあったので覗いてみた。そこに、新上五島町教育委員会文化財課が監修した『頭ヶ島に生きる』（NPO 法人長崎巡礼センター、2020 年）と題した、写真集

でもありガイドブックでもあるような大判の本が置いてあった。なかなか見事な出来映えだったので購入しておいた。写真が素晴らしいと、解説まで立派に思えてしまう。この本には、堂ヶ島教会の建設に至る経緯も紹介されていたので、それにもとづいて話を進めてみる。

> 堅牢だが美しく整った外観。頭ヶ島天主堂は、西日本で唯一ともいえる本格的な石造りの教会堂である。この重厚な石積みの天主堂が完成しえた理由は 3 つある。まず、頭ヶ島に材料となる良質な石（砂岩）があったこと、その石を採掘し加工するという成熟した石文化が周辺の友住と赤尾と江ノ浜にあったこと、そして建築家・鉄川與助という巧者がいたこと。この 3 つが揃ってはじめて完成した奇跡の天主堂である。建てられた場所は、五島のキリシタンの指導者だったドミンゴ松次郎の屋敷跡だ。白浜でも谷の一番奥まった場所にあり、初代となる日本家屋風の教会堂は 1887（明治 20)年に出来上がっていた。1910（明治 43）年になりようやく現在の頭ヶ島天主堂の建設が始まったが、頭ヶ島の経済状況は明治末期になっても改善せず、資金集めには大変な苦労があったようだ。信徒の中には資金をつくるために出稼ぎに出て、ふるさとに帰ることも、完成した天主堂を見ることもできなかった人がいたという。完成したのは 1919（大正 8）年。約 10 年という長い歳月がかかったのも、資金難による工事の中断が数度あったためと言われている。

頭ヶ島教会はそんなふうに紹介されているのだが、それを知ると、この教会は設計を担当した鉄川與助と信徒の人々の合作であることがよく分かる。信徒自らの手で石を切り出して積み上げたというのだから、私などは驚くばかりである。現在も信徒として生きる 83 歳の心優しい老婆は、「昔の人は今のように便利なものもなく、切り出した石ば運ぶとも、どがんして運んだんだとやろ。昔は伝馬船の小さい舟やったしなぁ。…涙んでてくる」と語る。そんな文章を読んでいると、こちらまでついつい涙腺が緩んでくる。

頭ヶ島教会もそうだが、五島の他の教会にも内部には椿の装飾が施されている。カトリックではバラやユリが聖母マリアの象徴とされてるとのことだが、禁教期の日本にはバラはなかったので、椿が代用されたと伝えられている。椿の花びらは 5 弁だがそれを 4 弁にして十字架を模したらしい。キリスト教の信仰が認められるとともに、椿の図柄が教会の壁のステンドグラスなどにはっきり描かれるようになった。尖塔に椿が描かれた教会もあった。そんな背景があったことなど、私はまったく知らなかった。私などは、そもそも五島が椿の産地であることすら知らなかった。椿と言われて思い出すのは大島のみである。地図をみていたら、福江にある空港の俗称は五島つばき空港となっていたし、そもそも我々の宿泊したホテルがつばきホテルだった。土産物屋には必ず椿油が置いてあった。何処にでもあるごく普通の樹木なので、私が

住む団地でも春になると椿が咲く。来年からは、椿の花を見ると五島のことを思い出すのかもしれない。

キリシタン集落での暮らしのこと

では、頭ヶ島での暮らしとは、いったいどんなものであったのだろうか。新たに開かれた土地には、移住元の外海で培われた石積み技術が駆使され、段畑（だんばたけ、段々畑のこと）や、石積み壁の小屋、石段、水路などが築かれた。「石の文化」が生み出したのは教会だけではない。現在でもあちこちに当時の景観が残っているとのこと。急な斜面に作られた段畑では痩せた土地でも育つ甘藷（「ごと芋」と呼ばれ、今では五島産のブランドとなったさつまいものことである）が栽培され、人々の暮らしを支える食糧となった。こうした集落の姿は、頭ヶ島に限らず他の集落でも見ることができるのだという。

以前から島で暮らしてきた「地下」（じげ、在郷または在郷の人のこと）の人々は、比較的条件の良い海岸沿いに軒を連ねて、主に漁業で生計を立てていた。それに対して、新たに移り住んだ「居付」（いつき、一定の場所に住み着くこと）の人々は、宗教上の違いなどもあって、海岸から少し離れた山の中腹の斜面などを開墾したので、家屋が散らばるような集落になったのだという。こうして、両者が対称となるような景観が生まれることになった。図式化して言えば、「漁業、仏教、海岸の集落」に対する「農業、キリシタン、山村の集落」という構図である。

潜伏キリシタンが集まった「居付」の集落では、傾斜地で生活するためのさまざまな知恵が駆使され、厳しい自然環境のなかで、「斜面にしがみ付くような生活」を今日まで根気強く続けてきたのである。移住先の五島における生活は厳しいものだったが、それでもいちばん大事にしていた信仰を守り続けることができた。賑わいからはるか離れた場所、人が住まない急な山肌、辺鄙な入り江。そうした土地が与えられたのか、自らそこを求めたのか、あるいはそこに住まざるを得ない事情があったのか、理由はそれぞれに違うのであろうが、きわめて不便な土地を切り開き、人目を忍んでキリシタンの信仰生活を続けてきたのである。生活に不便で人が近付きにくい土地のほうが、隠れて信仰を続けていくのにも都合がよかったのであろう。

上述したような図式は、頭ヶ島の集落にとりわけよく当てはまる。対岸の生活しやすい「地下」の集落と、急な流れの瀬戸を挟んで、対岸の人が近付きにくい不便な島につくられた「居付」の集落という対称である。無人の島であった頭ヶ島を最初に開拓したのは前田儀太夫（まえだ・ぎだゆう）であるが、キリシタンの集落に育て上げたのはドミンゴ松次郎である。その後は、カトリックの集落として厳しいながらも安定した、平穏な日々が続いたようだ。世界遺産に選ばれた頭ヶ島の集落は、潜伏キリシタンとその子孫が生み出した典型的なキリシタン集

落なのである。

かいつまんで大事なところを要約してみると、『頭ヶ島に生きる』にはおおよそ以上のようなことが書かれている。最後のページには、教会をバックにした 10 人の信徒の写真がある。その佇まいには、質素ではあるがどこかに落ち着きが感じられる。信仰を持った人の心の平安が生み出した落ち着きということであろうか。1867 年に 130 人ほどだった頭ヶ島の人口は、1960（昭和 35）年には 250 人近くにまで増えたものの、現在では 10 人台にまで減少している。急速な過疎化の進行である。しかしここで暮らす人々の笑顔は、古い写真に残る人々の笑顔と変わらない。頭ヶ島が「安住の島」であることの証しなのであろう。

離島に多大の関心を示してきた民俗学者に、竹田旦（たけだ・あきら）と宮本常一（みやもと・つねいち）がいる。ともに五島には何度も顔を出しているようだが、その二人が書いた文章を読むと、彼らの目の付け所がよくわかる。私が意匠や景観としての教会を眺めているのとはまったく違って、彼らが注目するのはあくまでも人間であり、人々の暮らしである。印象深いのでここに紹介しておきたい。まずは竹田である。『離島の民俗』（岩崎美術社、1985 年）には、最初に五島を訪ねたときの印象が次のように書き留められている。

> いったいに五島には、この島らしい特色がいくつかある。たとえば五島を漁業の島と名づけてもよかろう。中通島の奈良尾港などを基地とする巾着網、福江島三井楽のブリ定置網は日本一東洋一を誇ってきた。かつて李ライン問題でしばしば新聞紙上を賑わした以西底曳き網は中通島の奈摩港が基地である。福江島の富江港や荒川港は近海捕鯨の根拠地であったし、中通島の有川町からは南氷洋捕鯨船に 400 人も乗り組んで活躍しているとのことである。陸上では耕して天に至ると評言される段々畑が著名である。第一回の渡島の際、五島最初の港、奈良尾港に入港しようとする時、港内にひしめく大小各種のおびただしい漁船群にたまげたのであるが、街のうしろの山肌が、はるか見上げるまで空高く石垣をもって段々畑に積み上げられているのにも目を見張るほどの驚きを覚えたものである。この驚きは人間の限りない営みに対する畏敬の念でもあった。さらに段々畑の開墾が（中略）かつての切支丹の手によってなされたものであることがわかった時、これらの人々をより深く知ろうという学問的情熱が勃然と湧いてくるのであった。彼らの偉大な力の根源は何だろうかと。

では、もう一人の宮本の場合はどうであろうか。彼は、五島を 3 回目に訪れた際に頭ヶ島の老人たち全員に集まってもらって、話を聞いている。そのことは、『私の日本地図 5　五島列島』（未来社、2015 年）に登場する。この著作は、1968 年に出版された同名の著作の復刻版である。

彼は、「みな白髪。色は黒くやけているけれど、いずれも頑丈で、しかも清潔な感じの人びとで、明るく生きいきとしていて、いわゆる老人くささがない」島の老人たちに、好印象を抱いたようである。次のように書き留めている。

> 私はこんなにあかるく充実した老人たちの群にあったことはきわめて少ない。一人ひとりにあうときにはみな充実感をもっているけれども、群をなしている老人にあうと、中にひねくれたり、しなびたり、暗い感じの人がいるものである。それが少しもない。写真をとっておけばよかったのを、話がはずんで、ついそのことを怠った。この清潔さは長い苦難の生活にたえつつ、信仰によって支えられ、その苦難におしひしがれることがなかったためであると思われる。しかもこの人たちは、この島で畑をつくるだけでは生活をたてることができないから、みんな出稼ぎして来、年をとって島におちついて生活するようになったものである。この老人たちの中には、南氷洋で鯨を追った人もあれば、ブラジルで働いた人もある。シンガポールにいた人もある。小さな島の中のみに生きつづけた人ではなかった。そして、そのような外でのはげしい働きの後、島へかえって静かに余生をおくっている。そして島はこの人たちにとって天国にひとしいという。お互い気心がわかりあい、明るい天地と澄んだ空気。何一つ不平はありません、というのが老人たちの言葉であった。

五島の女の叫びとは

五島の人々とその子孫の暮らしは厳しいものだったが、そう書いたからといってその厳しさが直ぐに実感されるわけではなかろう。私だとて同じであり、よく分かったなどと簡単に言うつもりもない。たまたま興味深い著作を手にしたので、それを取り上げてもっとリアルな五島の暮らしの実像に迫ってみることにした。その著作とは、今井美沙子の『めだかの列島』(筑摩書房、1977 年）である。彼女は五島市福江出身のノンフィクション作家であり、現在は市のふるさと大使も務めているとのこと。私が彼女のことを知ったのは、昔に『男たちの天地』(中野章子との共著、樹花舎、1997 年)という本を読んだからなのだが、彼女が五島の出身者であると知ったのは、つい最近のことである。『めだかの列島』が出版されたのは今から 50 年近くも前のことであり、そこで取り上げられている話は、彼女がまだ小さい頃に母親から聞かされた話なので、今から 80 年近くも前の五島ことになろうか。本書の冒頭には、以下のような母親の独白の形を取った詩が載っている。いま詩と書いたが、詩と言うよりもこれはもう叫びであろう。圧倒される。

かあちゃんがなあ

筆ば持てとるじゃったら

五島のおなごどんの苦労ば

洗いざらい書くとに･･･

本土から離れた貧乏な島じゃけんど

こん島んおなごどんがおったけん

今んおなごどんが楽ばしてゆけるとぞ

自分の身ば売ってでん

こんまか弟や妹ば守ったおなごどんがおったけん

今ん五島があるとよ

こん五島ん海にはなあ

びっしゃりの（たくさんの）人間どんの

辛か悲しか涙がしみちょると

みんなみんな

船ん上から

五島灘ん波しぶきば見て

涙ばはらはら流したと

麦でんよかけん食いたかーッ

イモでんよかけん食いたかーッ

おらんでん（叫んでも）おらんでん

よか衆ん人間どんにゃ届かんじゃった･･･

しょんなかたい

食べんば死ぬとじゃもん

食べるために

たった食べるために

びっしゃりの人間どんが

こん五島ん海ば越えて行った

美沙子よ　美沙子

あがが大きゅうなったら

こん五島んおなごどんの涙ば

こん五島んおなごどんの無念さば

書いてくれろ

書いてくれろ！
かあちゃんはそれまで
どげんことがあってん
生きちょるけん
生きちょるけん

あまりにも赤裸々な五島の女の無念の叫びである。彼女は『めだかの列島』を書いて、母親から「書いてくれろ」と頼まれた約束を果たすのである。両親は、カトリックの信者だったので、「貧しいことを、不平不満をもらさず、それをありのままに受け入れる姿勢」で生きてきたようだし、「この世は短い、その短い間を、神さまの御心のままに過ごせ、必ず、来世の幸福が待っている」という教えを信じており、この「来世の幸福が、今を、生きる、一つの大きな励まし」となっていたとのことである。それにしてもである。「来世の幸福」を信ずるだけでは五島の女の無念は消えない。「よか衆」に対する恨みも噴出している。

「美沙子、世の中っちいうもんは、うんにゃ、世の中っちいうよりか、よか衆っちいうもんは、勝手なもんたい･･･」
「よか衆っち何のこと?」私が尋ねると、
「よかっちいうのはなぁ、天皇陛下や皇族や政治家や、会社ば持っとる人や、土地や家ばようけ持っとる人どんのことたい」
「なんで勝手じゃろうか?」また、尋ねると、
「麦もイモも食えんと四苦八苦し、自分の身まで売らにゃならん娘どんが出ても、何ちゃ心配もしてくれんじゃったよか衆が、戦争ん時にゃ、みんなひとつ心でっち、歯の浮くようなことばいうた。戦争がなかってん、ひとつ心は大事たい。イエズスさまは、人は皆兄弟じゃっちいうとられるんじゃけん。じゃけんど、よか衆は勝手なもんたい。こん戦争が済んで、まあだ五年しかたっとらんとに、よか衆はもう、ひとつ心っちいうことば、きれいさっぱり忘れてしもうとる。情けなかもんたい。美沙子、あがが大きゅうなってん、よか衆にはならんでんよかよ。よか衆には、地面ばはうごとして生きちょる人間どんの気持が判らんけんなあ。

カトリックの信者であるが故の、「よか衆」に対する厳しい批判である。「イモと麦ば食うてでん、神さまに近づこうとして、一生懸命生きてきた五島ん人間どんの心意気」が、そうさせるのであろう。母親は、「おなかいっぱいご飯食べにゃ、落ち着いて信心もできんばい」とも語

るのであるが、こうした両親の生き方に批判の目を向けたのが、ソ連船に拿捕（だほ）され抑留されて帰国した兄の岩男である。「二年ほどして帰ってきたときには、完全に洗脳されていた。貧しさと共産主義深く考えないうちに、すぐ結びついた。『ソ連は、何もかも平等たい。金持も貧乏人もなかとぞ!!!　土地もみんな国のもんたい。会社も国が経営しとっとよ。病気はしても、年ばとっても心配はいらん、何もかも国が面倒ばみてくるっとじゃもん、頭さえ良けりゃ、大学でん国が出してくるっとよ、貧乏じゃけんいうて、学問ば出来んもいうことはなかとよ。ほんに、共産主義はよかぞ!!!』」。

この兄が、上記のようなことを父母に言うと、父母は、「カトリックも共産主義も、人はみんな平等じゃっちいうことは同じじゃけん、うなずけるけんど、共産主義は魂の助かりのことはいわんし、この世んだけの平等じゃけんなぁ。共産主義も判らんじゃなかけんど、一番大事な神さまば信じらんちいうとじゃけんなぁ、神さまに造られた人間が、神さまば信じらんちゅうことは、おとろしか考えばい」と反論するのである。

父母のそうした反論に対して、兄は「じゃけんど、来世幸福も大事か知らんけんど、この世の地獄に苦しんどる人どんはどげんなる。たった食うために売られた娘のことば考えてみい、神さまが本当にいちょるんじゃろうかっち思う。人間が神さまん手の平ん中におるとなら、せめて、自分の身ば売らにゃいけん娘ぐらい助けてくれてもよかはずじゃなかか!!!　おっが思うに、神さまは人間の心次第じゃ。人間が必要とするならばおるじゃろうし、必要じゃなかならおらんじゃろう、そげん思う」と答えるのである。この兄の言うところ、そしてまた著者の言うところををもう少し聞いてみよう。

おらぁ、よく思うとよ。五島でキリスト教がなんで発展したか。五島ん人間どんは貧しすぎたんじゃ。食うものも食わんと、きつか仕事ばせにゃならん、漁師や百姓にしてみりゃ、何かにすがらんば生きてゆけん!!!　せめて、死んだ後、幸福が待っとるっち思わんば、この世ん地獄ば生きてゆけんかったとじゃろう。心ん底から神さまば信じるっちいうんじゃのうて、こん、この世ん苦しみから逃げたかとの裏返しで、神さまば拝んどるとよ。おれにいわせたら、消極的な生き方ばい。この世で自分の幸福ばつかまえんば。人間は平等っちいうことば知っとるんじゃけん…、それから考えて、天皇ばあがめまつっちょることはおかしかっちいうことに気付かにゃいけんとに…、おりゃあ、はがゆか!!!　五島ん人間どんに目覚ましてほしかよ。

抑留される前までは、月夜まわり（満月のころ、一週間ほど陸にあがり、身体を休養させる漁師の休日）に帰ってきたときなど、教会の御ミサをかかしたことのないほど、熱心な信者であった。ところが、抑留されて帰ってきてから、カトリックの思想と、共産主義

がどうしても結びつかず、思い悩んだ末、決心して、神父さまの所へ、カトリックを今日限りやめますと、わざわざ宣言しに行った。父母はことばを尽して止めた。たったひとりの岩男兄さんの老母も、それだけはやめてくれろと涙ながらに頼んだが、岩男兄さんは、それを振り切って、行ったのだった。幼少のころから、殆んどイモがゆで過ごし、貧しいゆえ、頭が素晴しくよかったのに、中学を出るやいなや、知的な世界（学問の世界）から隔絶された痛みは、岩男兄さんに限らず、五島の若者たちの痛みそのものであった。

何と哀しく切ない物語であることか。洗脳されたという兄の考えや棄教したというその行為を、いったい誰が批判することができよう、誰が嗤うことができよう。カトリックの地であった五島にこうした物語があったとは。この兄はほどなくして事故で亡くなってしまう。私にできることがあるとすれば、「五島の若者たちの痛み」を胸に刻みつけることだけである。昔こんな文章を読んだことがある。「貧しい人々に施しを与えれば、聖者と呼ばれる。貧しい人が何故こんなにも多いのかと問えば、共産主義者と呼ばれる」と。『めだかの列島』を読みながら、貧しさとカトリックの信仰と共産主義について、あらためて思いを巡らすことになった。

二つの城を訪ねて－原城と島原城－

総合研究 3 日目の夕刻に長崎に戻ったわれわれは、夜に市内を走る路面電車に乗って目的の食事処に向かった。私は今まで長崎には降り立ったこともなかったので、この町に路面電車が走っていることすら知らなかった。長崎は異国情緒に溢れた旧い街のようだから、こうしたレトロスペクティブな乗り物が似合っているに違いなかろう。遠くまで出掛けて来て、昔懐かしい路面電車に乗ったこともあって、昔のことが去来した。翌日はいよいよ最終日である。この日私が関心を寄せていたのは原城跡と島原城であった。この二つの城は、多くのキリシタンが関わった空前絶後の大事件として知られる島原の乱に登場する。島原の乱が、島原・天草の乱あるいは島原・天草一揆とも言われるのは、島原地方のみならず海を隔てた天草地方でも、領民らが一斉に武装蜂起し両者が糾合して闘ったからである。1637（寛永 14）年の 10 月末のことである。島原では、一揆勢が村々の代官を次々に襲撃して島原城を攻め、天草では、本渡城や富岡城などに攻め入ったのである。

われわれがこの日の午前中に訪ねたのは、島原の乱で世にその名を知られることになった原城の跡地である。ここは、島原半島で唯一世界遺産に登録されたところであり、半島の南端に近いところにある。もともと原城は、当時の領主であった有馬貴純（ありま・たかずみ）によって1496年に築かれた城であり、周囲4キロの三方を有明海に囲まれた難攻不落の天然の要害で、

本丸・二ノ丸・三ノ丸・天草丸（一揆勢が天草郡の軍勢で守備を固めたところ）からなり、別名「日暮城」とも呼ばれた美しい城であったという。貴純の孫にあたる晴純（はるずみ）の代に至って有馬氏は全盛期を迎えるのだが、その後次第に衰退する。

佐賀の龍造寺勢によって再三侵略されたが、それでも有馬氏は島原半島の南部をかろうじて支配していた。キリシタン大名としてその名を知られた有馬晴信（ありま・はるのぶ）が、1612 年に岡本大八事件（晴信と本多正純の家臣岡本大八との間に生じた贈収賄事件）に連座して死罪となったため、子の直純（なおずみ）が島原の地を治めることになった。だがわずか 2 年後には日向に移封されたため、島原における有馬氏の支配はここに終止符を打つことになった。その後、1616 年に松倉重政（まつくら・しげまさ）が入封して島原藩の藩主となり島原城を築城したので、一国一城令にもとづいて原城などは廃城となった。この一国一城令とは、徳川幕府が 1615 年に領内の居城以外のすべての城の破却を命じた法令で、主として西国諸大名の軍事力を削ぐ目的があったようである。こうして形の上では原城は廃城となったわけだが、壊されたのは外壁の一部にすぎなかったのだという。そうでなければ、大勢の一揆勢が長期にわたってここに籠城できるはずがない。

各地で反乱を繰り広げた一揆勢は、キリストの再来と崇められた天草四郎時貞を総大将として、1637 年の 12 月から翌年２月までの約３ヶ月間、原城に立て籠って幕府軍と闘った。一揆勢の軍勢は約 37,000 人（27,000 人とも言われる）であったのに対し、幕府軍は最終的には約 12 万の大軍を動員したのだという。幕府軍の総攻撃によって原城は陥落し、一揆勢は全滅した。その後原城は幕府によって徹底的に破壊しつくされた。乱の痕跡を消し去りたかったのであろう。原城があった島原半島南部は、キリシタン大名であった有馬晴信の所領であったこともあって、キリスト教の信仰が盛んな地域であった。天草もまたキリシタン大名だった小西行長（こにし・ゆきなが）の領地だったこともあって、島原と似たような状況にあったようだ。一時はキリシタン王国のような観を呈していたのだという。その後家康の禁教令によって、領民の多くは表向きは棄教したり潜伏したのだが、それでもキリシタンは隠然たる影響力を持っていたらしい。

では、もう一つの島原城はどんな城だったのか。有馬直純が日向に転封された後、島原はしばらくの間幕府領となっていたようだが、先に触れたように、その後松倉重政に与えられた。重政は当初有馬氏が居城としていた日野江城に入ったが、この城は場所が領地の南端にあって不便だったために、新しい城を築城した。それが島原城である。重政は、7 年の歳月をかけて城を完成させ、島原城の初代城主となった。島原城は五重の天守や数多くの櫓（やぐら）を持った立派な城であった。4 万石の地方の小大名にしては分不相応とも言える城であったが、そうなったのは、九州の外様大名に対する牽制とキリシタン対策という任務が、江戸幕府から重政

に与えられていたからだと言われている。武家諸法度で禁じられていた新しい城の築城や天守閣の造営が許可されたのも、その所為らしい。しかし島原城を完成させるためには多大な資金と労力が必要であったし、幕府の歓心を買うために石高以上の年貢を取り立てようとしたため、そのしわ寄せが領民にのしかかることになった。そのために、重政は領民から恨みをかうことになる。キリシタン対策のためでもあった築城が、島原の乱を生む一因になったというのは歴史の皮肉である。

家光からキリシタン取り締まりの不徹底を指摘された重政は、幕府の意向に忠実な人物であったために、徹底した弾圧によってキリシタンに棄教を迫り、棄教を拒否した者に対しては雲仙岳の熱湯を浴びせ、突き落としたりした。二代目の藩主となった息子の勝家は、父親以上の残酷極まる弾圧ぶりであったようだ。一揆勢は蜂起した当初島原城の城下に火を放ち城にも攻め入ろうとするのだが、堅固な城を落とすことはできず、原城での籠城戦へと転じていくことになる。我々が訪ねた時は島原城は改修中であり、再建されたその美しい城郭の全貌を眺めることはかなわなかった。ネット上には、端麗な城の写真とともに、島原城を「権威と弾圧の城」と評した記事もあった。外観とは裏腹の内実である。その表現を真似るならば、「籠城と全滅の城」となり、跡形もなくなって幻影と化した原城とはまさに対称的である。勝家は、島原の乱の平定後、領国経営の失敗によって反乱を惹起させた責任を問われ、大名としては異例の斬首刑になったのだという。これほどまでに美しい城の城主が斬首とは…。この島原城も明治期の廃城令ですべて壊されたが、戦後になって再建された。現在の城の姿があまりにも見事なのは、その所為である。

島原の乱雑感（一）－立ち返ったキリシタンたち－

島原の乱についても、今回の総合研究を機に俄勉強をすることになったので、興味深いところだけでも触れておきたい。面白かったのは、先に紹介した渡辺京二の『バテレンの世紀』（新潮社、2017 年）と神田千里（かんだ・ちさと）の『島原の乱』（中公新書、2005 年）である。『島原の乱』が余りに面白かったので、ついでに同著者の『戦国と宗教』（岩波新書、2016 年）まで手にしてしまった。歴史研究の深淵の一端に触れることができただけでも、幸せだったと言うべきか。最大の問題は、この島原の乱がいったいどのような性格のものであり、何を求めた乱だったのかということであろう。「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産に登録されたことを機に、長崎県は 6 冊からなる『旅する長崎学』を刊行していることは先に触れたが、その 3 冊目には島原の乱が登場する。そこでは、乱の概略が次のように紹介されている。前述の話と重なるところもあるが、言ってみれば現在の公式見解がどのようなものなの

かを知るためなので、そのまま紹介してみよう。

1637（寛永 14）年、飢饉と凶作、圧政に苦しむ島原と天草の民衆の間で不穏な動きがあった。キリスト教を棄てたことによるゼウス（神）のたたりだといううわさも流れるようになり、再びキリシタンにもどる領民も出てきた。同年、代官が妊婦を拷問死させたことや聖画像を踏みにじったことなどに、南目（みなみめ、島原半島のほぼ中心にある雲仙岳から見て、南側の地域のこと）の村々の領民が激昂。天草四郎を総大将に武力蜂起した。村々の蔵や食糧などを奪いながら、領民たちに一揆への参戦を迫った。天草でも呼応したように富岡城への攻撃が始まった。一揆勢は島原城を攻撃したが、落とせず、一国一城制で廃城になっていた原城に立てこもった。その人数は 3 万 7 千人ともいわれ、銃の鉛弾を溶かしてつくった十字架に結束を図った。実際に乱を主導したのは、信仰を棄てなかった有馬家の元家臣たちだったという。最初、幕府軍は力攻めで総攻撃を数回仕掛けたが、落ちなかったため、兵糧攻めに転じた。約 3 ヵ月にわたったにらみ合いも、ついに 1638（寛永 15）年、兵糧が尽き、脱走を図るものが次々と現われ、幕府は総攻撃。一揆勢を皆殺しし、四郎の首を出島の入り口にさらした。

以上のように書かれているのだが、こうした解説の下敷きともなり、これまで通説とされてきた乱の理解に改めて光を当て直したのが、「キリシタン信仰と武装蜂起」の副題が付された神田の『島原の乱』である。この本の意図するところは、次のような一文に明らかである。「大坂の陣から 20 年余りを経た 1637 年、天草四郎を擁するキリシタンが九州の一角で突如蜂起し、徳川幕府に強い衝撃を与えた。飢饉と重税、信仰への迫害が乱の原因とされるが、キリシタンが『異教徒』に武力で改宗を強制した例もあり、実情は単純ではない。本書は、戦乱に直面した民衆の多様で生々しい行動を描き、敬虔な信者による殉教戦争というイメージを一新。民衆にとって宗教や信仰とは何であったかを明らかにする」と言うのである。宗教や信仰が歴史において持つ意味を明らかにしたいという著者の言を、もう少し詳しく聞いてみよう。

通常この乱の原因とされるのは、島原・天草地方の大名が飢饉のさなかに領民に課した重税と幕府の指示のもとで行った大規模なキリシタンの迫害である。この説明は一見納得しやすいものの、具体的にみると問題が多い。重税に抗しての蜂起とはいうものの、（中略）一揆は、必ずしも重税に苦しむ領民一般の支持を得たわけではない。一揆は、同じく重税に苦しむはずの民衆にキリシタンへの改宗を武力で強制し、改宗を拒んだ民衆には攻撃を加えた。重税に抗する農民一揆と簡単に割り切れない側面がある。また迫害されたキリシ

タンが武装蜂起したという点にも矛盾がある。信仰篤いキリシタンたちは大名の迫害に直面して躊躇なく殉教の道を選んだことが知られるが、武力抵抗はしなかった。武装蜂起という行動様式がキリシタンとなじまないのである。また蜂起したキリシタンたちは棄教を迫られたから蜂起したのではない。彼らの圧倒的多数は一旦迫害に屈して棄教しており、棄教の後十年近く経ってから「立ち帰」った、即ち再度改宗した「立ち帰りキリシタン」であった。

島原の乱雑感（二）ー潰えた夢のあとにー

こうした文章を読んで、通説以外に何も知らなかった私などは、「目から鱗」といった気分であった。宗教や信仰の持つ意味などに何の関心も払ってこなかったのだから、尚更である。飢饉が発生したことも、領民が重税で苦しめられたことも間違いないところではあるのだが、この乱で年貢の減免といった要求が掲げられた事実はないという。また、この間吉村昭の「磔（はりつけ）」（同名の短編集に所収、文春文庫、1987 年）も読んだが、それによると、秀吉の禁教令に背いた罪で大阪で捕縛された 26 人を、長崎まで移送した幕府の役人は、途中キリシタンたちによって奪い返されるのではないかと思い、たいへんな緊張にさらされる。しかしながら、何事も起こらずに彼らは大勢のキリシタンたちが見守るなか磔刑（たっけい）に処されるのである。いわゆる 26 聖人の殉教の話である。彼らは殉教を誇りとさえ思っていたのであろう。

そうだとすると、島原の乱とは一体何だったのかが改めて問われることになる。キリシタンに立ち返って蜂起した領民たちは、村々でキリシタンへの改宗を迫り、従わなければ殺すとまで脅したし、実際に寺社を焼き僧侶たちを殺した。神田が注目するのは、一揆勢の殉教への情熱ではなくキリシタンに立ち返ったことである。では彼らは何故立ち返ったのか。「拷問に等しい重税の取立て」や「飢餓地獄」のなかで、「何故このような困難に直面させられるのかを自問した人々の脳裏に浮かんだのは、10 年ほど前、迫害に屈してキリシタンの宗旨を転んだ苦い思い出だったのではないか」と言う。「キリシタン信仰が盛んであった頃、人々は苦難に直面した折にキリシタンの信仰を拠り所にそれを乗り切ろうとしていた」ので、その思い出が立ち返りに結びついたようだ。

天草四郎の行ったとされるさまざまな秘蹟や、流布された終末の予言なども、立ち返りに拍車を掛けたに違いない。こうして、宗教が苦境にある者に勇気を与え、一大宗教運動としての乱が勃発するのである。もっとも、一揆勢のなかには改宗を迫られてやむなく加わった者もおり、原城に立てこもってからもかなりの数の逃亡者を生んでいる。それ故、一揆勢が皆殺しにあったといった言説は、「全員殉教という印象にもとづいている部分が少なくない」と言う。こ

うして神田は、「一揆の行動は、キリシタン大名の時代への、いわば回帰を意図している。言い換えれば、イエズス会宣教師たちの指導した通りに行動することが彼らの目的であった」のではないかと推定している。宣教師たちの指導した通りというのは、信仰の強制と異教徒に対する迫害のことである。何とも興味深い推論である。

先の渡辺も、「一揆が最初から狂信的ともいうべき信仰の熱気に包まれていたことには、数々の証言がある」と述べ、「島原・天草一揆を農民一変か、宗門一揆かと問う者は、前近代においては、貧困や抑圧に対する現実的抗議が必ず宗教的な感情によって駆動されるという、ありふれた原則を知らぬ」のであり、「宗門一揆と農民一揆とは表裏一体」なのであると言う。島原の乱の場合、「問題なのは、それが単なる農民一揆ではなくキリスト教信仰という、思想的な結集点をもっていた農民一揆」だったのであり、「宗教的幻想」という結集軸があったが故に、大規模でラディカルな一揆となったのだと指摘している。しかしながら、幕府軍の総攻撃を受けて、立ち返ったキリシタンたちの夢は見果てぬ夢となって潰えた。1638（寛永 15）年 2 月 28 日のことである。

一揆勢が籠城していた原城だが、近年の発掘調査によれば、本丸の入口や門の付近には、石垣や人骨が混在して見つかっており、原城の破壊が乱後であることがわかっている。敗走したキリシタンの捜索のために、山狩りも行われたらしい。一揆勢に参加した村の数は 13 村であったが、そのうちの 6 村は全滅したという。土地の荒廃を懸念した幕府は、小豆島や筑後から領民を強制的に移住させたとのことである。各藩の勝手な軍事行動を禁じた武家諸法度が、乱への対応を遅らせたこともあって、近隣諸国が一大事の時は幕府の許可がなくても支援できるように改められた。松倉勝家が斬首となったことは先に触れたが、天草を支配していた唐津藩の寺沢堅高（てらさわ・かたたか）は領地の一部を没収されたこともあって、その後自害している。総攻撃の際に軍令に違反した鍋島勝茂（なべしま・かつしげ）は閉門に処された。こうした乱後の処分は、幕藩体制の急速な確立をもたらしていった。

島原の乱の勃発が徳川幕府を震撼させたこともあって、乱をきっかけにキリシタンの取り締まりが九州のみならず全国的に強化された。以前は、各藩が独自の方法で宗門改（しゅうもんあらため）をおこなっていたが、乱後は、幕府によって寺請による宗門改として制度化されることになった。禁止されたキリスト教の宗旨ではないことを確認するのが宗門改であるが、その宗門改を寺が檀家であることを確かめることによって確実なものにしようとしたのである。乱後には対外的にも大きな変化が生じた。徳川幕府は、1639 年にイエズス会との結び付きが強かったポルトガルとの交易を断絶し、出島に住まわせていたポルトガル人全員を国外に追放した。湾岸の警備体制が全国的に強められていくなかで、長崎港の警備も厳しくなり、こうして鎖国が完成していくのである。

原城跡に佇んで－「人間だけに許された祈り」とは－

原城跡を目指した我々一行は、バスの駐車場からしばらく歩いて目的地に着いた。そこは広々とした台地のような場所で、周りには畑だけが広がっていた。風は少しあったが、冬だというのに暖かで、城跡を囲む島原湾の海は陽光を浴びて眩しく光っていた。世界遺産となった場所だからなのか、跡地を歩けば城の遺構を示すさまざまな案内板を目にすることになる。しかしながら、私にとってはそうしたものはどうでもよかった。一揆勢が立てこもった場所がここであり、立ち返ったキリシタンたちの夢が潰えた場所がここであることを知るだけで十分だった。正月早々のこの時期だからなのか、観光客は誰もおらずとても静かで寂しい場所だった。城跡の外れには天草四郎の像が建てられていた。南島原市出身の彫刻家である北村西望（きたむら・せいぼう）の作だという。城跡を去る際に、何故だか名残惜しさを感じて一、二度後ろを振り返った。

昼食を挟んで午後には島原城に向かった。こちらの城は本丸に当たる部分が歴史資料館となっており、キリシタン関連の資料や藩政時代の資料が展示されていた。この資料館から少し離れたところに、先の北村西望の作品を展示した西望記念館があった。彼の作品としてもっともよく知られているのは、長崎の平和公園に設置されている巨大な「長崎平和祈念像」であろう。何も知らなければ、彼のことを平和を希求した彫刻家のように思うかもしれない。しかしながら実像は違う。ネットで検索してみればすぐに分かる。彼は戦前児玉源太郎像や山県有朋像などの勇壮な男性像を始めとして、戦意の高揚を意図した作品を数多く手掛けている。西望も加わった「報国芸術会」によって、護国の勇士の胸像 7 点が制作され、1939 年に靖国神社内にある遊就館に献納されている。さらには、大政翼賛会の会合にも芸術界の代表者として参加しているというのである。

戦後になると西望の彫刻のモチーフは平和や自由や宗教に変化したようで、そういった作品を数多く制作したとある。冷ややかに評するならば、時節に合わせたということであろう。こうした人物の制作した「長崎平和祈念像」などをありがたがって見上げるつもりは、私にはない。原城跡の天草四郎像にも特段の感慨を覚えることはなかった。聖人にもなれなかった四郎の魂は、キリシタンたちとともに昇天したのであり、もしかしたらこうした像などはもともと不要だったのかもしれない。城跡に立って「兵（つわもの）どもが夢の跡」を静かに偲べば、それでよかったのであろう。

旅の途中で、中山亜紀写真集『*Blessing*　光の天主堂』（合同会社花乱社、2019 年）を手に入れた。長崎の教会を巡りながら撮影した美しい写真集である。そのなかに、次のような著者の言葉が挟み込まれていた。「人間だけに許された祈り」という行為をめぐる何とも穏やかな文章

である。私にとってはとうに「神は死んだ」ので、今更「神頼み」はしないが、それでも、時折空を見上げ、雲を眺め、風を感じ、星を探して心の中で祈ることはある。こうした文章を読むと、強ばってしまって柔らかさを失いかけた心身が、いつの間にやら解れていく。今回の旅の終わりに相応しい一文なのかもしれないと思われたので、改行なしで紹介し、稿を閉じたい。

シスターにうながされて、一度だけ聖体拝領の列に参加を許されたことがある。神父さまは、遠慮がちに並ぶわたしの頭に手をあてて、静かに言葉をかけた。あなたに、神の祝福を。その手のあたたかさを、心の高揚を、満ち足りた気持ちを、今、うまく言葉にするのはとてもむずかしい。ただひとつだけ、確実に感じたことは、宗教も人種も超えたところで、人間だけに許された祈りという行為がわたしたちにもたらすいつくしみと平穏。それは、どのような感覚ともちがう、不思議な幸福だった。撮影をはじめて、9 年が過ぎた。さなぎが蝶々に生まれ変わるように、みずみずしく明ける朝に、ちいさな日常をかかえた人びとがおとずれる天主堂。その窓辺にときどき降りてくる天使を、わたしはまだまだ、見つけられずにいる。